

## 2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について はじめに

これまで吾妻郡内で各市町村の教育委員会や財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により多くの奈良・平安時代の遺跡を発掘調査してきた。しかし奈良・平安時代全体を通しての資料は、なかなかそろわなかった。今回細谷B遺跡の発掘により、東吾妻町でこれまで明らかでなかった平安時代10世紀後半台の資料が追加された。そこでこれまでの資料を整理し、この地域の奈良・平安時代の土器の概要と変遷についてまとめてみることにした。

この地域の土器を理解するための地域として長野原町地域、東吾妻町・中之条地域に、旧月夜野町地域を加えた。旧月夜野町地域を加えた理由は、ここで生産された須恵器の多くがこの地域を含む県北部地域（長野原町・東吾妻町・中之条町・子持村・昭和村・沼田市等）に供給されていることによる。県内における奈良・平安時代の土器研究は、井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号1978年以降多くの発掘調査の増加とともに多くの研究者により盛んに行われてきた。筆者もその頃から発掘に参加して、これまで報告書をまとめるにあたって、土器の様相について調べてきた（註1）。その延長上で今回この地域の土器の様相についてまとめてみた。

### 1 吾妻郡内の奈良・平安時代の遺跡分布

この地域では、各教育委員会の遺跡分布調査により、郡内の多くの遺跡が明らかになってきており、また各市町村教育委員会や財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により、多くの遺跡が発掘調査されている（註2）。それらの成果は群馬県史や報告書などで明らかにされている。群馬県教育委員会群馬県文化財情報システムによると、この地域の奈良・平安時代の遺跡概要是、以下の表の通りである。両時代で重複している遺跡が多いが、奈良時代が18遺跡で平安時代が153遺跡である。奈良時代の遺跡は中之条町と東吾妻町に集中しており、他の町村では長野原町に1遺跡報告されているだけである。（この

羽根尾II遺跡出土の遺物を見せていただいたが、奈良時代とは特定は出来なかつた。）特に吾妻渓谷周辺から以西になると一軒の住居も確認されていない。集落の形成されている場所を調べてみると中之条町の名久田川流域や東吾妻町の泉沢川流域をはじめとする吾妻川に注ぐ小河川の流域で遺跡が形成されている。また長野原町では、水の確保が容易な榆木II遺跡や上ノ平遺跡や横壁中村遺跡等で、多くの集落が形成されている。

第22表 吾妻郡における奈良・平安時代の遺跡数

市町村名	奈良時代	平安時代	備考
高山村	0	1	新田西沢遺跡
中之条町	10	14	天台瓦窯含む
東吾妻町	7	22	金井廃寺含む
長野原町	1	106	奈良は羽根尾II
六合村	0	1	熊倉遺跡
草津町	0	1	井堀遺跡
嬬恋村	0	8	
合計	18	153	

## 2 東吾妻町と中之条町における奈良・平安時代の土器の様相

### (1) 奈良時代

〔土器師〕「暗文土器」は畿内の影響下で前代の7世紀から使われているほぼ平底の杯である。第2段階以降小型化して、暗文も少なくなっている。平安時代になると、他の杯類とともに使用されなくなるようである。「杯」は第1段階では球形であるが、第2段階になると球形がなだらかとなり、口縁部が立ち上がってくる。暗文土器と同様に平安時代になるとほとんど使用されなくなる。「皿」は、第1段階で出現し、第2段階では、小型化して平安時代になるとほとんど使用されなくなる。「壺」や「甕」は煮炊きや貯蔵に使用され盛んに使用される。壺も甕も従来の縦方向を中心としたヘラ削りから肩部に横方向の削りを用いるようになる。小型台付甕が第一段階で出土している。

〔須恵器〕杯類と蓋にほぼ限定され、煮炊きの

道具としては使用されていない。「杯」は、大小の2種類と底部に削りだしと貼り付けた付高台塊の2種類がある。杯は、第一段階では、大きく底部はヘラ起こし後手元あるいは回転による再調整が行われている物が多い。第2段階になるとやや小型化して、底部は回転糸切り再調整が多くなる。「蓋」は第一段階では反りを持つが、第二段階では反りが無くなる。

## (2) 平安時代

(9世紀代) 土器師は煮炊き用の大小の甕が使われるが、奈良時代に使われていた杯塊類は、高山村の「新田西沢遺跡」1号住居以外ではほとんど使われていない。須恵器の杯が多く使用される。土器師は煮炊きで使われている。

〔土器師〕 「甕」は、肩部に斜め横方向のヘラ削りが多く見られるようになり、口縁部が「コ」の字状になる。第2段階になると「コ」の字状口縁の甕の他に、器形が似ているが整形の異なる甕が存在するようである。このように平野部で多く見られる「コ」の字状口縁の甕と同時に異なる甕が東吾妻町や長野原町では存在するようである。

〔須恵器〕 (第1段階・9世紀前半) 「杯」は、底部がやや厚く、底面は回転糸切後再調整を行っていないものが多い。底径が比較的広く、底部中央が全体に厚く特に底部中央が、第2段階の杯と異なり薄くなっているものが多い。

(第2段階) 杯の他に新たな器種として「皿」と「高台のついた塊」が使われるようになる。「ロクロ甕」底部の回転糸切りを持つ小型の甕が使われるようになる。従来この甕はロクロ甕等呼称されてきた。須恵器工人の集落と考えられている藪田・藪田東遺跡で多く使用されていることや、群馬県では土器師の集団は、ロクロを使用しないと考えられていることより、この甕は須恵器工人の手により作成されたものと考える。そこで土器師ではなく、須恵器の範疇として扱ってみた。「皿」この段階から次の第3段階まで、使われている。しかしこの地域では出土量が少ないようである。「塊」と「杯」底径

が次第に小さくなり、器高が次第に高くなり、底部中央の器肉が薄くなる。「灰釉陶器」この段階から少しづつ出土するようになる。

(10世紀代) 土器師の甕が次第に須恵器の羽釜に、須恵器の杯や塊が、次の第4段階から出現する土器質土器に取って代わられる。古代の土器文化が大きく変化する段階である。

〔土器師〕 (第3段階) 土器師の甕が残るが、煮炊きの中心は羽釜が担うようになる。

〔須恵器〕 (第3段階) 「羽釜」煮炊きの道具として土器師の甕に代わるように羽釜が出現する。この羽釜には、大きく2つの分布地域がある。県北の利根郡・吾妻郡・旧子持村等を中心として分布する月夜型羽釜と渋川以南に分布する吉井型羽釜である。この2種類の羽釜は、分布域が異なっている場合が多く、同じ遺跡の同じ住居から両者がともに出土することはほとんど知られていなかった。しかし今回報告する細谷B遺跡や、長野原町の榆木II遺跡や上ノ平I遺跡では、同一遺跡でありしかも同一住居から両者が出土している。10世紀以降この地域の羽釜の生産と供給問題に新たな問題を突きつけている。「塊」と「杯」焼成が酸化焰焼成に近い杯や塊が使われる。塊の高台の貼り付けかたや口縁部の造り等、全体の造りや整形が難になってくる。

(第4段階) 煮炊き用として、新たに通称「土釜」と呼称されている甕が新たに使われてくる。全体に難な作りの物が多い。羽釜は、前段階同様に月夜野型と吉井型が共存して使われている。「土器質土器」難な作りの須恵器杯や塊に変わって、作りが非常に丁寧で器形は木器塊に似た新たな土器が使われてくる。この土器類を土器質土器と呼称する。高台のついた塊とつかない杯がある。基本的に酸化焰焼成である。

(11世紀代) 古代の土器文化が終焉を迎える段階である。県内の多くの地域ではこの第5段階で堅穴住居はほとんど造られなくなる。しかしこの地域では第6段階の11世紀後半と思われる段階の住居も存在しているようである。

(第5段階)「土釜」で口縁部が外反するものと直線のものが出土している。便宜的にA・B類に分けてみた。B類は整形方法が羽釜に似ている。「羽釜」は、月夜野型は出土しているが、吉井型は出土していない。しかし出土遺跡が少ない事による傾向であり、今後の調査でこの段階でも吉井型羽釜の出土は確認されるものと考えたい。「土器質土器」は、高台を持つ塊は全く出土していない。今後他の遺跡で少しあは出土するかもしれないが、基本的に高台を持つ塊は、使われなくなっている。土師質土器の浅い皿が次第に主流となり、次の第6段階では、この皿が出土するだけとなる。図には、参考資料として、浅間B軽石を覆土上に持つ土坑から出土した前橋市鳥羽遺跡SK332の資料を掲載した。

### 3 長野原町における奈良・平安時代の土器の様相

この地域では、六合村・草津町・嬬恋村とともに奈良時代の住居は発掘されていない。平安時代9世紀後半段階から一気に多くの集落が形成されてくる。

平安時代(9世紀)【土師器】は、甕が多く出土しているが、杯はほとんど出土していない。この傾向は東吾妻町や月夜野町と共通している。「須恵器」は皿や塊・杯が使用されている。

平安時代(10世紀)【土師器】「甕」は、「コ」の字状口縁の甕とそれ以外の甕の2種類が出土している。この傾向も東吾妻町の岡原2V1住居と共に通している。この段階から羽釜が使われるようになる。東吾妻町の細谷B遺跡同様に月夜野型羽釜と吉井型羽釜が、同一住居から出土している。盛器として前半は「須恵器」の杯塊が使われ、後半になると「土師質土器」の塊や杯が使われる。「灰釉陶器」もこの段階から多く出土する。

平安時代(11世紀)他地域同様に竪穴住居がほとんど消えてしまう段階である。しかし、これまでの発掘経験から長野原町ではこの段階の集落は存在している。甕や皿と小さな杯の出土が中心である。最近の発掘調査例で、この段階の住居が次第に確認されるようになってきた。

### 4 月夜野町における奈良・平安時代の土器の様相

この地域は、群馬県北部における奈良時代以降最大の須恵器生産地である。8世紀中頃から後半の沢入A窯跡群に始まり、8世紀後半以降の洞A支群や10世紀の深沢B支群に見られるように多くの支群がある。また藪田東遺跡等の粘土採掘跡の存在や須恵器窯付近に多い溶解した製品を出土している藪田遺跡や藪田東遺跡がある。各段階の土器の説明は、東吾妻町と中之条町における奈良・平安時代の土器の様とほぼ共通しているので、この地域の特色のみを説明する。

奈良時代(8世紀)集落遺跡として良好な遺物が出土した村主遺跡の資料がある。この遺跡からは8世紀前半段階で大量の須恵器が出土している。杯は大小あり、底部はヘラ切後、ほとんどが手持ちあるいは回転により再調整されている。付け高台や削出高台大きな塊も多く出土している。土器師では、一般的な甕の他に器肉が厚く器表面を磨いた地域独特な甕が出土している。

平安時代(9世紀)一般的な集落遺跡ではなく、須恵器生産に関連しているであろう、藪田遺跡の資料である。9世紀前半段階では、一般集落では多く見られない、底部端部でなく少し内側に高台の付く塊や、盤が多く出土している。この段階から須恵器の甕が使われてくる。この甕は以後11世紀まで使用されてくる。奈良時代に多く見られた土師器の杯や塊はほとんど使われていない。その役割は大量に地元で生産存在している須恵器の杯塊が担っている。ただ、煮炊きするための製品は、土師器の甕が使われている。また酸化焰焼成で灰褐色や橙色をしたロクロで整形された甕がこの段階から使用されてきている。

土器師生産集団は、ロクロを群馬では最後まで使用しないと私は考えている。そこでこの甕は、須恵器生産集団が、土師器甕を補うために自ら生産したものと考える。そこで須恵器の仲間として扱った。この甕は、県内では、10世紀以降羽釜が使われる段階で使用されてきている例が多いが、旧月夜野町

では、すでに9世紀前半の段階からロクロ整形の甕は造られ使用されている。おそらく須恵器生産集団が、土師器の甕を補うために生産を始めて、近隣の地域に供給していた物を、土師器甕がほとんど造られなくなる10世紀以降、羽釜の供給とともにとともに須恵器生産集団が生産し供給しているものと考えたい。このロクロ整形の甕と羽釜との関係については、すでに三浦京子・黒沢はるみ氏の指摘がある（註3）。

平安時代（10世紀）土師器は使われなくなり、須恵器が盛器と煮沸器の中心となる。灰釉陶器もこの段階から使用されてくる。この時期の最も特色として、羽釜の出現があげられる。これまで、基本的に煮沸器は、火を直接受けても割れにくい土師器甕が、その役割を果たしてきた。しかし羽釜の出現により土師器甕の役割が羽釜に取って代わられた。その結果土師器は造られなくなっていく。土釜と呼ばれている甕が出土することもあるが、この地域では少ないようである。10世紀後半段階になると須恵器の雑な造りの盛器である塊や杯も造られなくなり、酸化焰焼成の丁寧な造りの土師質土器が使われてくる。

平安時代（11世紀）関東地方全体で、竪穴住居が造られなくなる段階である。それと同じように、なぜか土器もほとんど使われなくなる。従来の土師器や須恵器といった区分も出来なくなる。少数の発掘例から、羽釜と甕、盛器として皿が少量出土する。おわりに

細谷B遺跡の出土遺物を見せていただき、この地域の奈良・平安時代の土器の様相を調べる機会をいただいた。しかし筆者の努力不足のために、土器を見ると行った基本的な作業をほとんどしないで、実測図の比較をすることによって、土器の特色を理解しようとした。そこに大きな無理がある。それを承知の上で、あえて今考えていることを記して、おわりとしたい。

① 筆者が経験してきた県央や吉井町を中心とした、奈良・平安時代の土器の要素とこの東吾妻町

や長野原町地域の土器の基本的な土器の組み合わせや変化はほぼ共通する。

② 平安時代の東吾妻町の長野原町に近い三島地区と土器文化に共通点が見られる。それは煮沸具における、月夜野型羽釜と吉井型羽釜が同時に使用されていることと、ほぼ同じ時期の土師器の甕で、県央部と共に「コ」の字状口縁の甕と似ているが胎土や整形方法の異なる甕が使用されていることである（註4）。また、東吾妻町の細谷Bや長野原町の上ノ平I遺跡や榆木II遺跡では、吉井型羽釜と月夜野型羽釜を同一住居で使っている。このような地域は、県内でほとんど無い（註5）。

③ 吾妻渓谷周辺から、長野原町遺跡では、現在まで、奈良時代の住居は発掘調査されていない。平安時代の9世紀後半段階になると、長野原町で100軒以上発掘されている。また六合村や草津町でも発掘されている。弥生～奈良時代まではほとんど集落が形成されなかった地域に一気に集落が造られてくる。この地域は平地が少なく水田面積は現在でも少ないことにより、新たな開発がどのような目的で行われたのであろうか。

新たに造られた平安時代の集落からは、多くの灰釉陶器や皇朝十二錢の貞觀永寶が出土している（註6）。他の出土遺物を見ても、高崎や前橋や月夜野町から出土する土器と、何ら変わることがない、当時の土器文化そのものである。

④ 平安時代になると、ほとんど集落が築かれていなかった長野原町に、同じ集落や同じ住居から分布圏の異なる月夜野型羽釜と吉井型羽釜が同時に使われている。県中央部や県北部からその地域の土器文化を持った人が、この地に一気にまとまって住むようになった。

以上の特色から、この地に一定の目的のために、平安時代中頃という限られた時期に、一気に県内から多くの人が移り住んだ事を示しているのではないだろうか。そこに政治的な力の存在を感じるとには無理があるだろうか。

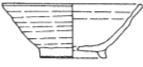
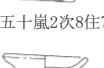
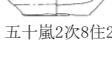
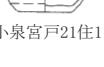
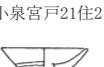
		土 师 器				
奈 良 時 代	第 1 段 階	暗文土器	杯	皿	壺	甕
		小泉天神4住1	小泉宮戸13住1	小泉天神3住4	小泉天神4住29	小泉宮戸13住8
		小泉宮戸13住4	小泉天神3住2	小泉天神4住21		
	第 2 段 階	下尻高H6住4・5	小泉天神3住1	小泉天神4住20		
			小泉天神4住14			
		小泉天神2住2	小泉宮戸24住2	小泉天神2住8	小泉宮戸24住4	小泉天神2住12
	8C 後半	小泉天神2住1	小泉天神8住3	小泉天神8住4		
		小泉天神2住3	小泉天神8住1			
			小泉天神8住2			前畠16住1
		土 师 器				
平 安 時 代	第 1 段 階		甕(コの字状口縁)		小型台付甕	
			前畠5住4		前畠3住4	
	第 2 段 階		前畠3住5			
		上郷岡原(2)V1住20	小泉宮戸7bc住7			
		上郷岡原(2)V1住18	上郷岡原(2)V1住21			

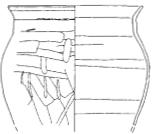
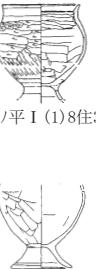
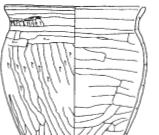
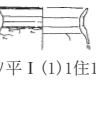
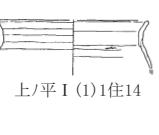
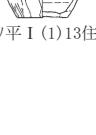
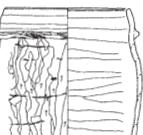
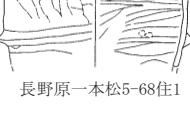
第70図 東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年図(1)

		須恵器			
		杯(大)	杯(小)	削出高台・付高台塊	蓋
小型甕	小泉宮戸13住5				
		小泉天神7住2	下尻高H6住2	小泉天神4住27	下尻高H6住1
		小泉天神7住3	小泉天神3住6	小泉天神4住26	小泉天神3住5
		小泉天神4住24			
		小泉天神2住9	前畠16住6	前畠16住7	小泉宮戸24住1
小泉宮戸24住3					
前畠16住2					
前畠16住3			前畠16住8		
須恵器					
杯					
ロクロ甕	上郷岡原(2) V1住15				
		下尻高H1住14			
			小泉宮戸7bc住1	小泉宮戸7bc住4	
			上郷岡原(2) V1住8	上郷岡原(2) V1住11	
			小泉宮戸7bc住3	上郷岡原(2) V1住12	
			上郷岡原(2) V1住6	上郷岡原(2) V1住9	
灰釉陶器					
				上郷岡原(2) V1住1	

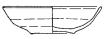
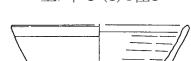
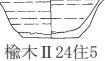
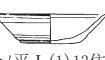
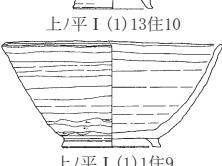
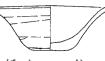
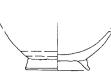
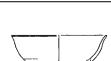
		土 師 器	須 恵 器			
第3段階 10C前半		瓢(コの字状口縁)  細谷B4住4	小型甕  細谷B4住3	月夜野型以外  細谷B4住9	月夜野型  細谷B4住5	羽 釜
第4段階 10C後半		土釜A  細谷B6住3		 細谷B9住8	 細谷B3住1	細谷B9住9
平安時代 第5段階 11C前半		 小泉宮戸6住1	土釜B  五十嵐2次8住1	 小泉宮戸6住2	 五十嵐2次4住1	小型羽釜  細谷B11住7
第6段階 11C後半		編年指標 奈良時代 第1段階 須恵器 坯底部ヘラ切再調整 第2段階 須恵器 坯底部糸切再調整 平安時代 第1段階 須恵器 坯底部の器肉の厚さが一定 第2段階 須恵器 坯底部の器肉中央部が薄くなる 第3段階 須恵器 羽釜の出現 第4段階 須恵器 土師質土器の出現 第5段階 須恵器 土師質土器皿の出現 第6段階 須恵器 土師質土器浅い皿主体	参考資料      前橋市鳥羽遺跡SK332			

第71図 東吾妻町・中之条町における奈良・平安時代の土器編年図(2)

須 恵 器	灰 紼 陶 器
塊	塊
 細谷B4住2	 細谷B4住1
(土師質土器)	
塊	塊
 細谷B9住3	 細谷B6住1
 細谷B9住4	 細谷B9住2
 細谷B9住5	
 細谷B9住6	
瓶	
 細谷B11住5	 小泉宮戸6住5
 細谷B11住1	 五十嵐2次8住3
 五十嵐2次8住7	 五十嵐2次8住2
 五十嵐2次4住9	 五十嵐2次4住4
 五十嵐2次4住8	 五十嵐2次4住3
 五十嵐2次8住6	 五十嵐2次4住5
皿	
 小泉宮戸21住1	
 小泉宮戸21住2	
 前畠14住2	
 前畠9住2	
 前畠14住1	

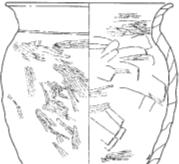
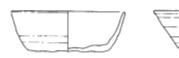
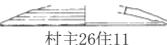
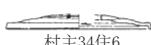
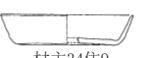
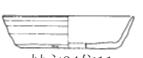
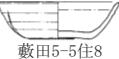
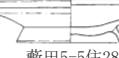
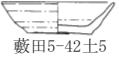
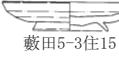
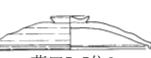
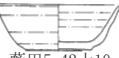
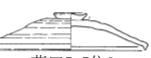
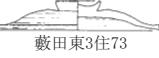
	土 師 器	須 恵 器
第2段階 9C後半	<p>甕(コの字状口縁)</p>  <p>榆木II 24住12</p> <p>上/平I (1)8住6</p>  <p>上/平I (1)8住3</p> <p>榆木II 24住15</p>	
第3段階 平安時代 10C前半	<p>甕</p>  <p>榆木II 69住3</p>  <p>上/平I (1)1住13</p>  <p>上/平I (1)1住11</p>  <p>上/平I (1)1住14</p>  <p>上/平I (1)1住12</p>	<p>羽釜</p>  <p>月夜野型以外</p> <p>上/平I (1)4住3</p>  <p>月夜野型</p> <p>上/平I (1)4住2</p>  <p>上/平I (1)13住15</p>
第4段階 10C後半		 <p>榆木II 16住7</p>  <p>榆木II 16住5</p>  <p>榆木II 16住8</p>
第5段階 11C前半		<p>瓶</p>  <p>長野原一本松5-68住2</p>  <p>長野原一本松5-68住1</p>

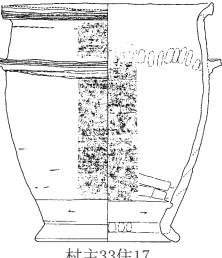
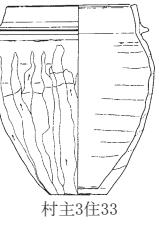
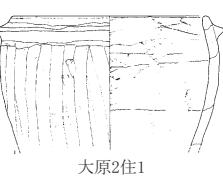
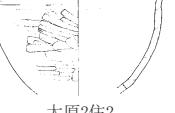
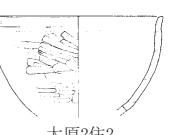
第72図 長野原町における平安時代の土器編年図

須 恵 器	灰 軸 陶 器
 榆木II 30住4	
 榆木II 24住6	 榆木II 24住1
 榆木II 24住7	 榆木II 24住3
 上/平I (1)8住1	 榆木II 24住2
 上/平I (1)8住2	 榆木II 24住5
 上/平I (1)13住7	 上/平I (1)1住1
 上/平I (1)1住4	 上/平I (1)1住1
 上/平I (1)1住5	 上/平I (1)1住2
 上/平I (1)13住10	 上/平I (1)13住6
 上/平I (1)1住9	 榆木II 69住1
	 上/平I (1)13住1
	 上/平I (1)13住2
	 上/平I (1)13住3
	 上/平I (1)13住4
<b>ロクロ甕</b>  榆木II 69住2	
<b>耳皿</b>  榆木II 69住6	
<b>(土師質土器)</b>  榆木II 16住4	
	 榆木II 16住3
	 榆木II 16住1
	 榆木II 16住2
 長野原一本松5-29住5	
 長野原一本松5-29住3	 長野原一本松5-68住3
 長野原一本松5-29住7	 長野原一本松5-68住5
 長野原一本松5-29住2	 長野原一本松5-29住4
	 長野原一本松5-29住1

		土 師 器					
		暗文土器	内黒土器	壺	皿	壺	甕
奈 良 時 代	8C 前半						
平 安 時 代	8C 後半						
平 安 時 代	9C 前半						
平 安 時 代	9C 後半						

第73図 旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(1)

		須恵器					
在地甕	小型甕	壺(大)	壺	削出高台塊	付高台塊	蓋	
	村主6住44 村主11住33  	 村主27住29	 村主27住25	 村主11住21	 村主11住28	 村主27住20	
		 村主6住30	 村主27住27	 村主11住23	 村主27住34	 村主27住15	
		 村主6住29	 村主11住17	 村主27住33		 村主11住11	
				 村主6住27	 村主27住32		 村主27住24
				 村主6住26	 村主11住25		 村主27住22
	 村主34住20		 村主26住12			 村主26住11	
			 村主26住13			 村主34住6	
			 村主34住9				
			 村主34住11				
		ロクロ甕	塊	盤			
 藪田5-42土26		 藪田5-3住26	 藪田5-5住8	 藪田5-5住22	 藪田5-5住26	 藪田5-5住4	
			 藪田5-5住14	 藪田5-5住23	 藪田5-5住28	 藪田5-5住1	
			 藪田5-42土5	 藪田5-42土16	 藪田5-3住15	 藪田5-5住2	
			 藪田5-42土10		 藪田5-42土18	 藪田5-5住3	
	 藪田東3住94		 藪田東3住39	 藪田東3住66		 藪田東3住73	
			 藪田東3住36	 十二原2住4		 藪田東3住74	
			 藪田東3住22	 十二原2住3		 藪田東3住75	
			 藪田東3住72			 藪田東3住77	

		須 恵 器		
		羽釜(月夜野型)		
第3段階 平安時代	10C前半	 <p>村主33住16 敷田東5住64 敷田東5住50</p>	 <p>敷田東5住49</p>	 <p>村主33住17</p>
		 <p>村主3住33 村主17住42</p>	 <p>村主17住17 村主17住31</p>	
第5段階 11C前半		ロクロ甕		
		 <p>大原2住1</p>	 <p>大原2住2</p>	 <p>大原2住2</p>

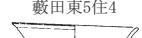
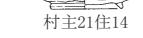
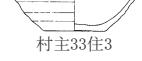
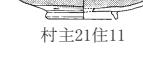
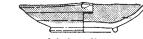
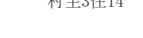
第74図 旧月夜野町における奈良・平安時代の土器編年(2)

(註1) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団刊行の『清里・陣馬遺跡』1981、『大原II・村主遺跡』1986、「矢田遺跡VI・VII」1996、1997、「荒砥荒子遺跡」(前橋市)1998等の中で、古墳時代から平安時代の土器について調べ、編年表を提示してきた。

(註2) この地域で最も古い発掘調査は、昭和36年～39年の三次にわたる群馬大学尾崎研究室により実施された「熊倉遺跡」があげられる。その後昭和57年から59年にかけて六合村教育委員会による三次の発掘調査が行われた。「出土遺物からみると、

集落の出現は9世紀中頃であり、ほぼ9世紀いっぱい終息したとみられる。」(井上唯雄 群馬県史資料編2 昭和61年)。「井堀遺跡」は昭和48年草津町教育委員会が群馬大学の協力で9世紀中頃から後半段階の竪穴住居1軒を発掘調査した。両遺跡とも県内においては、比較的古い段階での貴重な調査例である。

(註3) 三浦京子・黒沢はるみ「平安時代の煮沸土器について」『研究紀要6』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1989の中で、「ロクロ整形の甕と

		灰釉陶器
塊	坏	
		
村主21住4	戸田東5住29	村主21住10
		
戸田東5住26	戸田東5住1	村主21住8
		
戸田東5住27	村主21住3	村主21住14
		
村主33住12	村主33住3	村主21住11
(土師質土器)		
耳皿	塊	坏
		
村主3住11	村主3住10	村主3住12
		
村主17住25	村主17住19	村主3住15
		
村主17住21	村主17住1	村主17住29

羽釜は胎土・整形に共通点があり、同一の生産体制によって生み出された可能性がある・・・と指摘されている。

(註4)「コ」の字状口縁の甕と胎土や色は近いが、器形がやや異なり、「コ」の字状口縁の甕は、肩部に横方向へのラ削りを持つが、この削りが、縦方向で、胴部から頸部まで及んでいるものが多いようである。他に長野原町『向原遺跡』のD区8号住居-8や9号住居-5の甕や『上ノ平I遺跡』の22号住居-12・13の甕等がそれに該当する。実態は不明で

あり、今後の検討が必要であろう。

(註5) 中沢 悟「月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」『大原II遺跡・村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

桜岡正信「月夜野型羽釜の生産と流通」『研究紀要』21 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003

(註6) 中沢 悟「長野原上ノ平I遺跡出土の貞觀永寶と県内出土の皇朝十二錢について」『群馬文化』289 2007